

令和 4 年 6 月 12 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02586

研究課題名(和文) 千葉エリアにおける有機農業運動の形成と展開に関する社会学的考察

研究課題名(英文) Sociological Study on the Development of the Organic Farming Movement in the Chiba Area

研究代表者

米村 千代 (YONEMURA, Chiyo)

千葉大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：90262063

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,800,000円

研究成果の概要(和文)：千葉エリアにおける有機農業運動の形成と展開過程について、首都圏にあって生産者と消費者が近接するという地域性および空港建設反対運動等の歴史的、社会的文脈から社会学的に考察した研究である。(1)有機農業運動の構築過程、(2)世代の経験と消費行動の関連性、(3)現在の多角的展開の動向についてインタビュー調査、アンケート調査、文献調査から把握することを目的とした。千葉エリアには40年間続く団体がある一方で、その理念を受け継ぎつつも新しく派生したグループや、ユニバーサル農業等の生産者と消費者を媒介する新しい取り組みが見られ、農業と食を軸とする支援や連携の多角的展開が見いだされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

千葉エリアを対象とすることで、おもに農村地域において研究が進んできた有機農業運動について、首都圏を対象とした特徴を捉えた点、都市と農村、消費と生産といった二分法で独立の研究対象として想定されてきた生産者と消費者の家族変動に関して、有機農業運動を切り口として一つの枠組みのなかで捉える可能性を提示した点に学術的な独自性がある。産直、提携というキーワードに代表される「運動」としての有機農業と、マルシェやカフェなどと連動する今日的な活動の両方を射程に含んで研究し、食と農を軸とした人々の連携や支援の在り方を多角的に捉えた点、今後のオルタナティブ経済のあり方を展望した点に社会的意味がある。

研究成果の概要(英文)：This is a sociological study of the development of the organic farming movement in the Chiba area. It focuses on the regional characteristics of the proximity of producers and consumers in the Tokyo metropolitan area and the historical and social context of the movement against the construction of the Narita airport. This study aimed to investigate (1) the construction process of the organic farming movement, (2) the relationship between generational experience and consumer behaviour, and (3) current trends in multidimensional development. In the Chiba area, there are groups that have existed for 40 years as well as newly emerged groups and new activities that mediate between producers and consumers, such as universal agriculture. Through these considerations, a multidimensional development of cooperation and support, based on agriculture and food, was observed.

研究分野：社会学

キーワード：歴史社会学 家族変動 有機農業運動

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 有機農業における運動論的特徴

本研究は、千葉県における有機農業運動の形成と展開の過程を歴史社会的に明らかにすることを目的としてスタートした。先行研究において、有機農業は化学肥料を使わない農法という技術的な側面だけでなく、運動的な側面を併せ持っていたことが指摘されてきた(Holt and Reed 2006)。日本においても、「産直」「提携」という言い方で表わされるような理念を、生産者と消費者との間で共有し直接的関係を構築する点を特徴の一つとしていた(榎潟 2008 など)。こうした理念や関係に基づく運動としての有機農業が、40年を経るなかでどのような変化を経験し、次世代にどのように継承されているのかを調査研究する段階にある。

### (2) 千葉エリアの特性

先行研究において有機農業運動は、過疎地域の地域再編の取り組みに代表されるように「地方」や「農村」を対象として取り上げられることが多かった。その点に関して、千葉県は2つの点において独特であると考えられる。第1に、千葉県は、日本有数の農業県であると同時に東京郊外に位置するベッドタウンであり、生産者と消費者が同じ県に共住するという地理的特徴を持っている。第2に、千葉は、戦後最大の住民運動と呼ぶべき成田空港反対運動に象徴されるように、戦後日本の開発経済と農業政策の矛盾が顕著に現れた場であった。こうした千葉エリアの特徴から有機農業運動を検討することに意義があると考えた。

### (3) 今日の展開との接合

有機農業運動が内包していたオルタナティブ運動（「オルタナティブな政治」）という性格が、千葉圏域の地域的、歴史的な文脈において、どのように構築され、展開したのかを把握するためには、今日的な展開を問うことも重要である。その際に、千葉県の地理的特徴をふまえ、これまであまり顧みられなかった担い手（生産・消費の両側）の家族構造（ジェンダー役割の配列）やライフスタイル、担い手たちの多様な相互行為、経験・知覚の編成に注目することとした。

## 2. 研究の目的

本研究では、戦後日本における農村の近代化、農業も含めた工業化、開発経済の進展等の歴史的な文脈において、首都圏という地域的特徴を持つ千葉を対象として有機農業運動の展開過程を捉えることを目的とした。その際に、これまでの先行研究ではあまり着目されてこなかった家族という視点をおくことも本研究の特徴である。具体的には、以下の3点を目的として設定した。

### (1) 地域的、歴史的な文脈から捉える有機農業運動の構築および展開過程

千葉県下においては、成田空港反対運動から生まれた有機農業運動だけではなく千葉県農村中堅青年養成所の卒業生らによっても複数の産直運動が誕生する。空港問題とは系譜を異にするこれらの運動についても、いくつかの事例研究はあるものの、その成立と変容過程を総合的に捉えた研究は管見の限り存在しない。また、有機農業運動の創設世代は高齢期を迎えており、その展開過程を掘り起こし記録に残すことも重要な意味を持っている。

### (2) 家族変動論からの把握

生産者と消費者が共住する地域における家族意識と農業経営を家族変動論の枠組みから捉える。従来の研究において、両者は、農業従事者と都市サラリーマン層とに別個に捉えられてきた。本研究においては、両者の相互作用を捉えることを目的とする。両者の接点には、有機農業運動の理念のもとに関係を形成しているという共通認識と同時に、生業の違いや生産者と消費者としての関心の違いもあると考えられる。千葉という地理的特質から、農業者の生活と消費者の生活が日常的に重なり合っていることも考察の対象となる。

### (3) 有機農業運動の今日的展開

千葉県には40年間にわたって続いてきた産直グループが存在する一方で、若い世代を中心とする新しいグループや活動も生まれている。後者のグループは、「顔の見える関係」を基盤とする従来の運動の特徴を引き継ぎながらも、「提携」に象徴される従来の運動型の活動とは異なり、他の団体との協働や、インターネット等の新しい販路を利用した新しい連携・支援方法を構築している。本研究では、千葉県特有の有機農業運動の歴史的展開という文脈をふまえつつ、新しい動向についても研究を進め、そこにどのような連続性や新規性が見いだされるのかを探究することとした。

## 3. 研究の方法

上記の目的に照らし、以下の3つの方法から研究を進めた。

### (1) インタビュー調査

産直グループの当事者および新規参入層、生産者、消費者をつなぐ支援団体関係者を対象としたインタビュー調査を実施することとした。まずは1970年代以降、農家や都市家族などが有機農業運動を展開していく過程と今日的展開について調査する。加えて、1990年ごろから展開する「ユニバーサル農業」等の活動が、千葉県という特殊な文脈とどうかかわっていたかを考察する。新旧の活動にかかわっている当事者にインタビューを実施し、千葉県における有機農業運動／産直運動を個々に取り上げるのみならず、運動間の直接・間接の、あるいは歴史的・構造的関係を把握する。

## (2) アンケート調査

市民の社会経済的地位・支援意識・政治的態度と有機野菜生産・消費行動との関連、およびその地域ごとの差異を調べる。そのため、複数地域を1つの母集団とした標本調査（無作為抽出）の計量分析を行なう。生産・消費行動の説明要因としては、全国調査である日本版総合社会調査（JGSS）による先行知見（石田他2005；大橋2010；山本2007など）を参考にしつつも、本研究のパイロット調査で得られた知見を取り入れ質問項目を設定した。

## (3) 文献調査

主に、1947年から刊行された農業普及誌『農業千葉』と千葉県農村中堅青年養成所に関する文献資料を収集、分析する。戦後から今日にいたる千葉県下の農業政策や農業教育の変遷をたどるとともに、農業従事者が様々な機会に記した資料を時系列で比較検討する。これらの調査を通して、単に千葉県における農業の地域的・形態的変容を跡付けるだけでなく、農業の変容と担い手の意識変化を相互に関連づけながら分析する。

## 4. 研究成果

### (1) 有機農業の構築および展開過程

有機農業団体へのインタビュー調査および文献調査を実施した。生産者へのインタビュー調査に基づき、データ整理を行い、論文を執筆中である。文献調査としては、千葉県において1947年から60年にわたって刊行された『農業千葉』を対象として、60年間の千葉県農業の変容過程を考察した。特に特集記事に着目し、60年間に千葉県の農業においてイシューとなってきたトピックの変化を追った（七星・米村2019）。また、『農業千葉』の表紙に登場する女性の語りに着目し、若年女性農業従事者を対象としてデータを分析し、農業経営や家事労働、農業に関する意識をまとめ、動向を追った（七星・米村2020）。

同じく文献調査として、千葉県農村中堅養成所に関する資料を収集し、千葉における農民教育の戦後史を追い、農村の民主化が叫ばれた敗戦直後から高度経済成長期へと農業政策が転換していくなかで、将来農業を担うことを予定されていた若い世代が抱いていた農業観や家族観を把握した。同養成所では、女性たちが自身の母親のことを記述している『娘たちのつづいた農村の母の歴史』（和田・竹内編1973）が編纂されている。将来農業に従事することを予定していた女性たちが、母親に対して両義的感情を抱きながら、新しい農業や家族関係を模索する意識を読み取ることができる。農村の民主化、農業の工業化、都市化という社会変動のなか、封建性を脱して転換していくことを求める外部からのまなざしのもとにあって、当事者である女性たちが農業に関する意識をどのように形成していたのかを、当事者の語りとして記述されている資料から追った（七星・米村2020、米村2022）資料からは、家業としての農業経営と近代家族意識との間での葛藤や農業経営における世代間の緊張関係が見いだされ、これまで農村と都市、伝統家族と現代家族として別個に捉えられてきた両者を一つの枠組みで重層的に捉えていく可能性と重要性が示唆された。

### (2) 世代の経験と消費行動の関連性（「千葉県北西部のライフスタイルに関する調査」）

2018年に千葉県北西部の住民を対象に「千葉県北西部のライフスタイルに関する調査」（以下2018年調査）を実施し、有機野菜の消費層や地域参加と地域意識の関連の分析を行った（木村2020；吉岡・木村2020）。調査は、有機農業運動の展開が早くからみられた千葉北西部エリアにおける有機野菜の消費実態の把握をおもな目的として、20-79歳の男女を母集団とした無作為抽出調査として郵送法で実施した。有効回収票は1000票、有効回収率は40.0%である。基礎分析の結果、高齢層、印旛地域・東葛飾地域に住む層、ふだん生産者を気にかけて農作物を購入する層、10代後半に親と政治についての意見を交わしていた層などが有機野菜を消費しやすいことがわかった。有機野菜の消費層の分析では、年齢や居住地域などにくわえ、幼少期に父母と熱心に政治について話した経験のある人々が有機野菜の消費を行いやすいことが新しくわかった（吉岡・木村2020）。研究を通して、親子関係（世代の経験）が回答者の消費行動に直接影響しているのか、それとも現在の回答者の価値観やライフスタイルを媒介しているのかという点について、さらに今後の調査研究で明らかにしていくという課題を得た。今後、2018年調査で有機野菜の消費が比較的多くみられた印旛地域・東葛飾地域など地方部を中心とした無作為抽出の調査票調査を行い、この課題をさらに検討していくことを予定している。

世代の経験と消費行動との関連、それらを媒介しうる価値観やライフスタイルに着目することは、文献調査やインタビュー調査で得られた40年間の有機農業運動の先を展望する際にも有

効な視点である。

### (3) 新規就農層、ユニバーサル農業への着目

インタビュー調査に加え、下記の公開セミナーの開催、ユニバーサル農業フェスタに関する参与観察を通して、食にかかわる多角的な展開過程を把握した。ネットワーク形成におけるキーパーソンを招聘し、地域における女性たちの社会活動の歴史と現在、および展望について公開セミナーを実施したほか（セミナー①）、フードバンクや子ども食堂、ユニバーサル農業など、食を介した新しい連携や支援の現状を把握した（セミナー②、③、⑥、⑦、⑧）。調査した取り組みは、必ずしも有機農業運動と直結するわけではないが、地域を拠点とした食にかかわる連携や支援を特徴としている。千葉における有機農業運動は40年の歴史があり、その間、大きな変化を経験しているが、新規参入層においても同様に、短い期間でグループの再編や販売方法の変化が起こっていることがわかった（セミナー④）。ユニバーサル農業も近年の新しい取り組みであるが、数年間でネットワークが拡大し、コミュニティカフェなどの拡がりも見られる。農業を軸とする連携の仕組みは、生産者と消費者が強く結びつく「提携」から、多角的な展開を見せている。1970年代以降千葉県域において形成された有機農業団体は、一方で活動を継続している団体もあり、またその活動から育った次世代が新しい形でのグループを形成している場合もある。新しい世代の分析からは、今日の社会状況下での経営の持続可能性や新しい連携の創出を捉える枠組みを検討することも今後の研究課題として浮かび上がってきた。

#### 講演会・公開セミナーの開催（計12回）

- ①「地域をつなぐ こどもカフェの取り組みから」（2017年10月16日）
  - ②「農地を守る新たな経済を学生と考える ーちばユニバーサル農業フェスタの取り組みを事例にー」（2018年5月21日）
  - ③「食を通じた支援を考えるーフードバンク・子ども食堂の取り組みからー」（2018年7月9日）
  - ④「千葉における有機農業と産直活動ー三つ豆ファームの取り組みー」（2018年6月18日）
  - ⑤「人口が減少する中でも農山村の集落を消滅させない地域づくりー静岡県浜松市における調査&実践活動からー」（2018年7月23日）
  - ⑥「kogai から「食べ物運動論」への変則的経路：戦後環境史の論点」（2019年5月13日）
  - ⑦「房総いすみの「田舎暮らし」を支援する」（2019年5月27日）
  - ⑧「越境する福祉」（2019年6月3日）
- （他4件）

#### <引用文献>

（本研究課題による2020年度までの業績は5. に掲載している。）

- Holt, G. and M. Reed (eds.) 2006 *Sociological Perspectives of Organic Agriculture: From Pioneer to Policy*. Cab Intl.
- 石田章他 2005「消費者の有機農産物購買行動に関する一考察：JGSS-2002 データを用いて」『農業市場研究』14(2):45-54
- 梶瀧俊子 2008『有機農業運動と<提携>のネットワーク』新曜社
- 大橋正彦 2010「わが国消費者におけるエコ諸行動とその規定因ーJGSS-2002 と JGSS-2008 の比較を中心にー」『日本版総合的社会調査共同研究拠点 研究論文集』10: 61-72
- 和田金次・竹内義長編 1973『娘たちのつづいた農村の母の歴史』たいまつ社
- 山本理子 2007「無農薬・有機栽培野菜の購入を規定する要因ーJGSS-2002 を用いた分析」『日本版総合的社会調査共同研究拠点 研究論文集』6:181-192
- 米村千代 2022「娘たちにとっての『家』ー戦後農民教育と農業メディアにみる後継者育成ー」鈴木理恵編『家と子どもの社会史』吉川弘文館 253-284

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 七星純子・米村千代	4. 巻 355
2. 論文標題 農業雑誌における若年女性農業従事者の語りの変遷 雑誌『農業千葉』を対象とした予備的考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 千葉大学大学院人文公共学府 研究プロジェクト報告書	6. 最初と最後の頁 79-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 吉岡洋介・木村宏人	4. 巻 40
2. 論文標題 「千葉北西部のライフスタイルに関する調査」の概要と基礎分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文公共学論集	6. 最初と最後の頁 216-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 吉岡洋介	4. 巻 23
2. 論文標題 調査実習の事例報告 無作為抽出標本の重要性を意識した調査票調査の実践：千葉大学文学部「暮らしと政治についての意識調査」（2017年度）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会と調査	6. 最初と最後の頁 79-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Aug Nishizaka	4. 巻 53
2. 論文標題 Appearance and Action: Sequential Organization of Instructions in Japanese Calligraphy Lessons	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Research on Language and Social Interaction	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/08351813.2020.1739428	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 船戸修一	4. 巻 219
2. 論文標題 『関係人口論』の地域社会学的考察：浜松市天竜区佐久間町の集落調査を踏まえて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域社会学会会報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 船戸修一	4. 巻 11
2. 論文標題 『他出子』の帰郷をめぐる親世代の意識の交錯：浜松市天竜区佐久間町を事例として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東海社会学会年報	6. 最初と最後の頁 127-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米村千代	4. 巻 30(2)
2. 論文標題 『家族社会学研究』2010年以降の展開	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 家族社会学研究	6. 最初と最後の頁 221-227
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 七星純子・米村千代	4. 巻 345
2. 論文標題 雑誌『農業千葉』にみる戦後農業の変容過程 - 千葉県における60年間の軌跡	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 千葉大学大学院人文公共学府プロジェクト報告書	6. 最初と最後の頁 58-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中澤秀雄	4. 巻 23(9)
2. 論文標題 高度成長期における地域社会生活・労働連帯の浸食--労働・農民運動の消滅と焼畑型ジェントリフィケーション--	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学術の動向	6. 最初と最後の頁 40-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5363/tits.23.9_40	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Aug Nishizaka	4. 巻 2(2)
2. 論文標題 A sentence dispersed within a turn-at-talk: Response-opportunity places as loci for interactional work.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 East Asian Pragmatics	6. 最初と最後の頁 229-258
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1558/eap.34561	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Aug Nishizaka	4. 巻 28(6)
2. 論文標題 The moral construction of worry about radiation exposure: Emotion, knowledge, and tests	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Discourse & Society	6. 最初と最後の頁 635-656
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0957926517721081	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米村 千代	4. 巻 2
2. 論文標題 家族研究における戦前/戦後の諸潮流 - 家族変動論の一つの困難 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ブックレット東京学派	6. 最初と最後の頁 51-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 船戸 修一	4. 巻 219
2. 論文標題 「関係人口論」の地域社会学的考察：浜松市天竜区佐久間町の集落調査を踏まえて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地域社会学会会報	6. 最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 船戸 修一	4. 巻 26
2. 論文標題 実家や集落との関わりに対する「他出子」本人の意識：浜松市天竜区佐久間町の調査から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会と調査	6. 最初と最後の頁 78-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 船戸修一
2. 発表標題 『農村』におけるコミュニティ：『他出子』から見た集落維持の危うさと可能性
3. 学会等名 第59回 環境社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Aug Nishizaka
2. 発表標題 Partitioning the Participation Population Space in Reaching a Mutual Agreement
3. 学会等名 American Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 木村宏人
2. 発表標題 プロ・スポーツのファンが醸成する地域意識 量的調査による拡大体 験の実証
3. 学会等名 第68回数理社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomone Komiya, Aug Nishizaka, Kotaro Sambe, & Sachie Tsuruta
2. 発表標題 Accomplishing the Intelligibility of the Distinctiveness of Activity
3. 学会等名 American Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Aug Nishizaka
2. 発表標題 The differentially ascribable nature of seeing: Projects and visual perception
3. 学会等名 Conference of the International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 船戸修一
2. 発表標題 『他出子』本人の意識調査からみる集落維持の可能性と課題：浜松市天竜区佐久間町を事例として
3. 学会等名 第92回日本社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 船戸修一
2. 発表標題 『関係人口論』の地域社会学的考察：浜松市天竜区佐久間町の集落調査を踏まえて
3. 学会等名 地域社会学会 2019年度第4回研究例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nishizaka, Aug
2. 発表標題 Perception that matters in interaction.
3. 学会等名 International Conference on Conversation Analysis (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nishizaka, Aug
2. 発表標題 Mixed perceptions in instructional settings: seeing under the aspect of proprioception relevant to the current activity.
3. 学会等名 International Conference on Conversation Analysis (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nishizaka, Aug
2. 発表標題 Seeing how it is done: The sequential organization of instructional actions in a Japanese calligraphy lesson.
3. 学会等名 ARLI SIG 14 Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yonemura, Chiyo
2. 発表標題 Comment for ' Fantasy and Agony of International Marriage: Stories of Korean Men ' ' (Discussant)
3. 学会等名 the 2018KFSA-JSCFH Joint Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 船戸修一
2. 発表標題 『他出子』の帰郷をめぐる親世代の意識の交錯：浜松市天竜区 佐久間町を事例として
3. 学会等名 第11回東海社会学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池岡 義孝・藤崎 宏子・石原 邦雄・米村 千代
2. 発表標題 ラウンドテーブル 『家族社会学研究』30年の歩み
3. 学会等名 第27回日本家族社会学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 米村 千代
2. 発表標題 「現代社会における「家」の変容 世代間継承意識の現在」
3. 学会等名 ファミリービジネス学会研究会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 米村 千代
2. 発表標題 「家訓の歴史的変遷と現代的意味について」
3. 学会等名 第18回「東洋思想と心理療法」研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤 裕治・船戸 修一・武田 俊輔・祐成 保志
2. 発表標題 「NHK『ふるさと通信員』の遺したもの：長野県・三重県を事例として」
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会・2017年度秋季研究発表会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 船戸 修一
2. 発表標題 「親世代から見た『他出子』認識と『他出子』本人の認識の差異：浜松市天竜区佐久間町のA集落を事例として」
3. 学会等名 第90回日本社会学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西阪 仰
2. 発表標題 心配と安心の道徳的構成 感情・知識・検査
3. 学会等名 第90回日本社会学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tomone Komiya & Aug Nishizaka
2. 発表標題 Invisible and visible dangers: Locally achieved conceptual connections
3. 学会等名 13th Conference of the International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis (IEMCA)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 米村 千代
2. 発表標題 家族研究における戦前/戦後の諸潮流 - 家族変動論の一つの困難 -
3. 学会等名 ワークショップ 「社会学の中の東京学派」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 七星 純子
2. 発表標題 若年女性農業従事者の綴りの言説分析 - 雑誌『農業千葉』の表紙を飾った女性たちは何を綴ったのか -
3. 学会等名 2021JADH SIGLITH研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 Dennis Day and Johanness Wagner (eds.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Multilingual Matters	5. 総ページ数 328
3. 書名 Objects, Bodies and Work Practice	

1. 著者名 藤崎 宏子・池岡 義孝編 (分担執筆 米村 千代)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 『現代日本の家族社会学を問う 多様化のなかの対話』	

1. 著者名 Favareau, D, A.Nishizaka et.al.	4. 発行年 2018年
2. 出版社 University of Tartu Press	5. 総ページ数 418
3. 書名 Co-Operative Engagements in Intertwined Semiosis: Essays in Honor of Chales Goodwin	

1. 著者名 水島 治郎、米村 千代、小林 正弥	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 312
3. 書名 公正社会のビジョン	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鶴田 幸恵  (TSURUTA Sachie)  (00457128)	千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授   (12501)	
研究分担者	船戸 修一  (FUNATO Shuichi)  (00466814)	静岡文化芸術大学・文化政策学部・教授   (23804)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中澤 秀雄 (NAKAZAWA Hideo)  (20326523)	中央大学・法学部・教授  (32641)	
研究分担者	清水 洋行 (SHIMIZU Hiroyuki)  (50282786)	千葉大学・大学院人文科学研究院・教授  (12501)	
研究分担者	出口 泰靖 (DEGUCHI Yasunobu)  (70320926)	千葉大学・大学院人文科学研究院・教授  (12501)	
研究分担者	西阪 仰 (NISHIZAKA Aug)  (80208173)	千葉大学・大学院人文科学研究院・教授  (12501)	
研究分担者	吉岡 洋介 (YOSHIOKA Yosuke)  (90733775)	千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授  (12501)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	七星 純子 (NANAHOSHI Junko)	千葉大学・大学院人文社会科学研究科・博士後期課程  (12501)	
研究協力者	木村 宏人 (KIMURA Hiroto)	千葉大学・大学院人文公共学府・博士後期課程  (12501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	三部 光太郎  (SAMBE Kotaro)	千葉大学・大学院人文社会科学研究所・博士後期課程  (12501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関